

運営委員会委員長賞





## 国際交流協会を通じ世界の方々との絆

渡辺 幸彦

77歳（東京都調布市）

心配していたことが現実となって起こった。

父や兄と同じ64歳のとき、突然胸が焼け爛れるような七転八倒の苦しみ、武蔵野日赤病院に搬送、心筋梗塞の手術が行われた。

その3ヵ月後に4カ所の梗塞が見つかり、バイパスの手術が行われ、医学の進歩と妻の介護により障害者にはなったが運よく一命はとりとめられた。

娘が「パパは人のためになることをするために、神様に生かされたのよ」その言葉に答えなくてとはと、体育会系だった私が、過激な運動は出来なくなると思ったのと、定年後に毎日テレビの番だけをして家族に嫌がられないようにするため、サークル活動で健康面も考えて、自分も楽しく人にも喜ばれ、社会に役立つことは無いかと市役所に見学に行った。

200程あるサークルの中で国際交流協会が、会社で経験した自分の能力を發揮するのに適した所と思い選ぶことに決めた。

調布市に住んでいる外国人4500人、その内、協会に所属している300人の方々、日本人スタッフが約400人の協会、スタッフはボランティアで、何より日本語の習得が必要な方に対して、日曜日以外、朝の9時から夜9時まで仕事帰りの人でも来られるように、他の協会には無い、マンツーマンの授業を行っている。

外国人が喜ぶ富士山を眺めながらのバス旅行や日本料理の講習会、日本文化を知ってもらうための活花や、手芸、ニューイヤーパーティでの獅子舞やお囃子などの催しをする楽しい企画運営を考え行う事業部に席を置くことにした。

外国人に日本語を教えるには、3カ月のセミナーを受けなくてはならず、初日から日本語のあまりの難しさに日本人である私が音を上げてしまった。

見学の折、外国の方の中に若い美人がいて、そんな人に日本語を教えることを楽しみにしていたが、終了時に、日本には女言葉や男言葉が有るために同性同士しか教えることが出来ないと言われ、そんなことならば講習会の前に言ってくれていればいいのにと内心ガ

ツカリした。

周年事業を迎えたとき、皆さんに楽しく喜ばれる大きな企画を考えた。

国際交流協会の特長を生かして、外国人の家族に対して出演募集をし、チャリティージユニアミュージカル、世界平和を願う（ハート TO ハート）を催すことにした。

我が家の家族全員が、それぞれが持っている特技能力を生かして、娘にはストーリーを作って台本にし、唄の指導と全般に亘り担当してもらうことにし、舞台経験豊富な妻には演技指導を、孫には主役の片方の天使の役を、私が企画運営を担当することにした。

何しろ数年日本に住んで居るとは言え、外国の子供達、少しは日本語を理解しているが、ことばの意味が理解出来なくて感情表現に欠けているため、先ずは皆で日本語中心に指導することにした。

（世界平和を願い、いつまでも戦争が終わらないことを嘆いた神様が平和を望み、双子の天使を人間界に送り出した。しかし、人間の世界で双子の天使が見たものは、人と人が仲良くしない状況や、戦争によって家族を亡くした子供達、2人は、行く先々で人々を励

まし力付ける。最後に世界が平和になれることを全員で協力して行こうと唄い語りかける）  
こんなストーリーを毎週末、1年かけて練習に励んだ。

主役の双子の天使には、万が一病気でもされてはと思い、ダブルキャストにし、インドネシア系中国人のFさん（演技も抜群、感情表現も素晴らしい人）、日本語の歌を教えるのに苦労したインドのJちゃん、イギリスから参加の、3人のO姉弟はあまりの可愛さに舞台に出ただけで、見ている人が笑顔になってしまうほどだった。

照明や音響は、会社に居たときのお得意さんだったテレビ局の方々が協力してくださり、2日間の4回公演で2800人の参加を得て公演は大成功に終わり我々家族、スタッフ、外国人の心が一つになり絆が生まれた。

その後も「世界の皆と手をつなごう」を中国、ハワイ、アメリカ、フィリピン、朝鮮、日本の子供達の唄や踊りのア라운드・ザ・ワールドの公演も行い、東日本に大震災があったときには、夏の暑いときに協会の会員に手伝ってもらって支援のバザーを行い、その売上金を我々と関係のある宮城県国際交流協会仙台市や名取市に、協会員から寄付された支援物資を持って行き、会員で作っているハワイアンバンド、達者で長生きを願ってその

名を「アロハオタツシャーズ」の皆さんと、被災地松島のお嬢さん達のフラダンスの協力もあり、楽しい会が出来、被災地の方々に大変喜ばれ嬉しく思った。

その後、チャリティーコンサート、ワールドミュージック&ダンスも催し、日本の子供達のジャズダンス、日本伝統文化の尺八やお琴の演奏、タイ舞踊、ハーモニカの合奏、ギターの合奏、朝鮮舞踊はコンクールで優勝しただけの価値がある素晴らしい踊りを披露してくれた。

最後に会場のみなさんで手をつなぎ「小さな世界」を合唱して、世界の方々との絆が益々強くなったと思った。

現在も支援の活動は継続して行われ、依頼された支援物資の衣料品を直すためのミシン10台を贈ることが出来、飢餓の国への支援も行うことになり、協力して下さった皆さんに感謝している。

自分たちの小さい地域での活動により絆が出来それぞれが広がり、世界中に戦争が無くなり、平和な生活が出来ることを願っている。

## 受け継がれる交流

坂本 亜紀子

31歳（埼玉県三郷市）

「じーじ、けっけよ！」

先にマンションに入った息子が、こちらに呼びかけています。

じーじ、けっけ!! おじいさんが、咳き込んでいる。

どうしたんだろうと思って、車から荷物を抱え、急いで声の方へ向かいました。

そこには、70過ぎと思われるおじいさんが座り込み、苦しそうに咳き込んでらっしゃいました。あわてて、「大丈夫ですか? 救急車呼びましようか??」と声をかけました。

おじいさんは、「大丈夫。いつものことだから。」とたちあがり、ありがとくと、部屋へ戻って行かれました。

それ以外になすすべはなく、お部屋に無事に戻られるのを確認して、私たちもうちへと戻



りました。

これがおじいさんとの出会いでした。

私の中にある「地域交流」は祖母から学んだ気がします。

宮崎の片田舎。街灯もなく、夜になれば真っ暗。

コンビニまでは車で行かなくてはなりませんし、スーパーも近くにはなく、お年寄りの買い物は移動販売車頼りの地域で育ちました。

ご近所さんはみんな知り合いです。

「あっこちゃん！今日はみちこさんな、畑にでちらんよ。みてこんね。」

「あっこちゃん！うらんばあさんな、今日は病院の日やがね。こんかったよ？みてこんね。」

「あっこちゃん！はなちゃんな、足がいてして、今日はこんかったち。みてこんね。」

実家で同居する祖母と話していると、こればかり。

毎日畑仕事をするはずのおばあちゃんが畑に出ていないと、見てこいと言い、病院にくる

はずのおばあちゃんがきてないと見てこいと言い、足が痛いと言って老人会に来なかったおばあちゃんがいると見てこいと私に言うのです。

裏のおばあちゃんも、みちこさんも、はなちゃんも、みんな80過ぎのおばあちゃん。  
みんな一人暮らしをしています。

うちの祖母は、足が悪いため、なかなか外で情報を得ることはないのですが、近所のおばあちゃんたちの憩いの場と化した我が家で、情報収集をしています。

帰省すると、おばあちゃんたちが集い、「あらー！あっこちゃん！よか男ん子を産んでー！」  
「あっこちゃん！あらー、ちびちゃんなよかにせになったがねー！」とうちの息子を褒めてくれ、遊んでくれます。

息子も、褒められていることがわかるのか、まんざらでなく、おばあちゃんたちに、「ばーば、ばーば」と寄っていくのでますます可愛がられます。

そのため、帰省から戻ってきてても、おじいちゃん、おばあちゃんを見ると誰彼かまわず、「じーじ、ちわー！」「ばーば、ちわー！」と挨拶をし、「あらーいい子ね。」と褒められ

ば満面の笑みを浮かべ、反応がないと、悲しそうにしています。

マンションへ引越してきたばかりの私は、1階と4階にという近さに住んでいながらも、咳き込んでいたおじいさんの情報を何も知りません。

都会と田舎。

家族で定住しこれまで作り上げてきた人間関係も違いますし、当然の関係だとも思いますが、なんだかさみしい気もしていました。私の住んでいるマンションは、20数年前に建てられたもので、当時から住んでいる人がほとんど。そのため、自分と同世代の家族は少なく、親世代、もしくは祖父母世代の方がかりでした。なんだか、自分だけよそ者のような気がしてなかなか自分からマンション住人の輪の中へ入っていけなかったのです。

ある日、自転車置き場まで走って行った息子が見当たらず、マンション内をうろろしている、息子があの咳き込んでいたおじいさんに手をひかれてきました。

あら、なにかしたかなと思いましたが、

「頭がいいねー、おじいちゃんちを覚えていたんだねー。」と話していました。

よくよく聞くと、マンションのエントランスで会い、ちわーと声をかけてきて、じいじはこっちよとおじいさんの家まで手をひいて行ったそうです。

「どこか、お出かけされるところだったんじゃないですか？すみません。」

と私が言うと、「デイサービスの介護車を待っていただけなのでね」とおっしゃいました。幼稚園に送りに行く時間と、週に2日のデイサービスに行く時間が重なり、息子を介して少し話をするようになりました。

介護車が来るまで5分ほどお話をし、お見送りしてから幼稚園に送っていくようになってのです。

おじいさんは、奥様をなくされてひとり暮らしということ。

料理はできないので、1日3食宅配のお弁当を食べているということ。

息子さん家族は車で1時間ほどのところに住んでいるということ。

お孫さんはいないため、いたらこれくらいなのかなーと息子を優しく見つめています。

おじいさんを介して今度はマンションの方ともお話しするようになりました。

おじいさんは初代のマンション組合長だったらしく、このマンションで知らない人はいないのよと、2階に住むお婆さんが教えてくれました。

夏の日、いつもの時間。いるはずのおじいさんがいませんでした。

寝坊されたかなーと思っただけで、おじいさんが出てこられる前にデイスリーブスの介護車が到着し、気になったので、一緒にお部屋を訪ねました。

呼び鈴を鳴らしても、応答がなく不安になり、管理人さんに事情をお話しして、鍵を開けてもらいました。

デイスリーブスの職員さんがドアを開けると、外の熱気にも負けないくらいの熱気もわっと出てきました。

「救急車を呼んでください！」というデイスリーブスの職員さんの声で、管理人さんがあわ

てて救急車を呼びに行きました。

私は、ドアの外で、息子を抱いたまま、立ち尽くしていました。

祖母の「見てこんね」という言葉が頭をよぎります。

なんで、はやく見に行かなかったのか。なにかあったら、どうしよう。

職員の方から、ご家族の方ですかと声をかけられますが、「いいえ」と答えるのが精いっぱいでした。

幸い、おじいさんは軽度の熱中症で、2〜3日入院しましたが、元気になりました。

ただ、マンションに戻られることはなく、これを機に、息子さんの家で同居することになったと、管理人さんに聞きました。

私は、息子に、「じーじは？」と聞かれるたびに、思いだし反省する日々でした。

一人暮らしのお年寄りだったんだから、もっと気を配ればよかった。

実家から届いた果物のおすそ分けをした時に、部屋が暑いなと気づいていたのに、なんでもっと強く言えなかったのか。冷房は嫌いと言われて、冷えすぎますもんねなんて答えた自分が、情けなく思えました。

そんなある日、ひとりの男性が我が家を訪ねてきました。

男性はおじいさんの息子さんで、私寄り一回りくらい年上だったと思います。

その節はありがとうございますと、息子にお菓子を持ってきてくださいました。

父は明るくなりました。息子さんとお話しするのが楽しみだったようですと、一言添えて。

都会での地域交流を考えると、なんだか、自分とは遠い遠い世界のことのように思っていました。地域交流に都会も田舎もない。自分で勝手に決めつけていただけのような気がします。ここでもあっちゃんになれる。なにより息子はもう実践している。誰彼かまわず挨拶ではなく、ご近所さんに挨拶をしつかりしているのです。

祖母と息子から改めて、地域交流を学んだ気がします。

## 父から学んだ地域の絆

大西 賢 41歳（東京都日野市）

父が救急車で病院に運ばれたと聞いたときは、さすがにびっくりした。心臓に病気があって、ニトロを持ち歩いていることは知っていたが、それほど深刻な病状だとは思わなかったのだ。

実家から離れて暮らしている私も大急ぎで駆けつけたのだが、病室にいた父は案外ケロリとしていた。ベッドの周りに、大勢の見舞客がいたからだ。職場の同僚かなと最初は思ったのだが、聞いてみると、同僚ではなく、「地域の友達」ということだった。

父は都内の職場で長年、職人をしているのだが、40年以上その職場で働いているとあって、地域に沢山の友達がいるらしかった。

父と友達との交流は、もっぱら喫茶店に行ったことがあるのだが、「地域の交流の場」



として、言われてみれば相應しい場所のように思えた。

マスターは商売っ気がなく、気が向いたらランチのしょうが焼きを大盛りにするような人だ。つい最近までテーブルがゲーム機だったという今どき珍しい店で、いろんな職種の人が集まっては、色々な情報交換をしていたらしい。「交差点にあるトンカツ屋が潰れそうだ」とか、「先日の大雨で花屋の前のドブが溢れたらしい」とか……。気難しい顔をしたマスターがこだわりのコーヒーを出す店ではなく、すべてが「適当」のお店だったが、それが地域の人たちに愛されていたらしい。父もまた、その店の常連だった。

地域の交流というと、すぐに公民館などの公的な施設が思い浮かぶが、「昔からある喫茶店」というのは、とても有効なようだ。マスターは地域の色々な情報に精通しているし、チェーン店のカフェにはない居心地の良さがある。父が救急車で運ばれたという情報はまずマスターに入り、そこから常連さんに伝わり、

「じゃあお見舞いに行こう」

となったらしい。寂しがり屋の父にとって、喫茶店の常連さんが病院まで駆けつけてくれたことは、よほど嬉しかったらしい。自分の容態もそっちのりで、父は見舞客とお喋りし

ていた。

父は小さい頃、ひどく貧しい生活を送っていたらしい。時代も悪かったのだろうが、そのなかでも父の家庭はとびぬけて貧しかったらしい。だが、そんななかでも、父は悲観的になることはほとんどなかったという。地域の絆があったからだ。お腹を空かせて歩いていると、近所のおばさんが、

「あんた、お腹空いてるんでしょ？おいも食べていきなさい」

などと気軽に家に招いてくれたらしい。ある意味、少年期の父は「地域の絆で食べていた」のだ。今の時代からは信じられないが、その当時は、そんな絆が父を支えていた。そんな状況で育った父は、どうも本能的に「地域の絆の大切さ」を分かっていたようである。

ある日、行きつけのパチンコ屋の前でお腹を空かせているホームレスの方が座り込んでいた。父はパンと牛乳を買い与え、ちよつとばかり「生きる大切さ」を語り、その場で別れたという。見返りも何も求めない。

「俺も小さい頃、地域の人に助けってもらったから」と平然としている。現代の日本ではや

や珍しい光景だが、地域の人に支えられて生き抜いてきた父には、自然な行動だったようだ。

父は、地域という空間自体を信頼しきっているようだった。たとえば、父は腕時計を持って家を出ない。「時間が知りたければ、近くに知る知り合いに聞けばいい」というのだ。実際、地域のどこへ行っても知り合いがいるので、腕時計がなくても父は困らないのだ。

父と歩いていると、後ろから来るタクシーが「プップー！」とクラクションを鳴らしてくることがある。邪魔だからではない。知り合いのタクシー運転手が「元気か？」と挨拶代わりに鳴らすのだ。東京都内では珍しいようだが、40年以上その地域で暮らし、絆を深めてきた父にとっては、当たり前前の光景のようだった。

正直な話、私は、「地域の絆」というものに懐疑的だった。学校と職場の繋がりしか知らない私には、「地域の絆」と言われてもピンと来ないのだ。

だが、父のベッドの周りに沢山の見舞客が訪れたのを見て、そして父の今までの行動を思い返してみると、「地域の絆」の大切さが分かるようになった。

それまでの私にとって、地域の人たちは、「たまたま同じ地域で暮らしている人」とい

う程度の認識だった。だが、そうではないのだ。そこには家族の絆とも、職場の絆とも違う、不思議な結びつきがあった。

父は職人であり、自営業者である。自営業者にとって、今の不況は深刻である。厚生年金ではなく国民年金のため、老後の生活の不安がとても大きいのだ。父はそんな不安を、家庭でも職場でも漏らさなかつた。父は「あの喫茶店」でそんな不安を漏らしていたのだ。マスターをはじめ、タクシー運転手、パン屋さん、新聞配達員……。そんな人たちが、お互いに不安を出し合い、励まし合ったらしい。そうすることで、父はまた元気をもらい、明日を生きる活力を得てきたようだ。父と何度かその喫茶店に行ったが、父は出されたコーヒーを全部飲まない。半分ぐらい飲んで、あとは残してしまう。「勿体ないなあ」と思ったが、父の目的はコーヒーを飲むことではなく、地域の人と交流することであり、励まし合うことだったのだ。寂しがり屋の父にとっては、地域の絆は、家族の絆と同等の重要性を持っているようだった。

主婦や高齢者が地域の人と交流を深めることはよくある。だが、現役世代の男性が地域

の絆を強めることは、そう多くない。そんななかにあつて、父はかなり積極的に地域の絆を深めたほうだ。中学も満足に卒業しておらず、読み書きがほとんどできない父は、感覚的に、地域の絆がどれほど大切か、分かっていたようだ。昔ながらの喫茶店に連日のように通い、雑談をかわす。ただそれだけのことだが、それがやがて容態を心配して病院に駆けつけてくれるような仲になっていく。ベッド脇で、

「あの店にあんたがいないと寂しいよ」

などと言われているとき、父は本当に嬉しそうだった。それまで私は、絆は学校か職場でつくるものだと思いきんできたが、そうではなく、地域でも強い絆が作れることが分かった。私は今まで父から色んなことを教えられてきたが、今回の救急車騒ぎで、地域の絆がどれほど大切で温かいか、よく分かった。

父と喫茶店の常連さんたち。サークルを正式に作ったわけでもなく、意識的に絆を作り上げたわけでもない。あくまでも、自然発生的に絆ができあがっただけだ。そう、地域の絆に加わるには、サークルや会に所属する必要はないのだ。ごく自然に地域でやっている行為が、いずれは絆に発展していくものなのだ。

私も、近所に感じのいい店があつたら、ちよくちよく入るようになっている。家に閉じこもらず、なるべく地域の人と雑談をかわす。

それが、地域の絆を深める第一歩なのだ。

地域の人と雑談をかわせばかわすほど、よく分かる。世の中は悪い人ばかりじゃないことを。

## 子育て自助サークルを立ち上げて

林 夏子

34歳（東京都武蔵野市）

夫の転勤に伴い、生後5か月の長男を連れて東京にやってきたのは早3年前のことです。現在1歳と4歳の男の子の母親です。

のんびりとした田舎で育った私は、都会のスピード感に戸惑いました。

歩道で子供がもたもたすれば、後ろから来た自転車の人から私の耳元で聞こえるように舌打ちされました。地域を走るコミュニティバスでベビーカーを畳むのが遅いと運転手さんに叱られ、家に帰って落ち込む毎日でした。

そうやって四苦八苦しながら学んだことは、東京は人が多い分、社会のルールを守らなければ上手く生きていけないという事でした。田舎で暮らしていたころのように、のんびり

と道を歩いていては人につかっってしまうのです。

そのため、まだ小さな子供と外出すると、どうしてもダメダメダメを連発せねばなりません。

自然と出かけることが億劫になり、外出が減りました。まさに都会での孤独な子育てⅡ「子育て」のスタイルにピッタリ当てはまっていました。

そうした都会での子育てに行き詰っていた私にも転機が訪れました。

子供と立ち寄った、近所のコミュニティセンターのキッチンからクッキーを焼く、甘く香ばしい香りがありました。その時、母もこうしておやつによくお菓子を作ってくれていたなあと思ひ出しました。キッチンでクッキーを焼いていたのは母と同じくらいの年代の女性でした。

香りに誘われた私たち親子に気が付かれて、にっこりとほほ笑み、「よかったらどうぞ」と出来立てのクッキーとブラウニーの味見をさせてくださいました。

ひとくち、いただくと、素材そのものの味のする、やさしい味。



私が子供のころ、母に焼いてもらったクッキーと同じ味がしました。

初めてお会いする方でしたが、思い切って「作り方を教えてください」と言ってみました。幼稚園のバザーで焼き菓子を出品することになっていた、というのは後付の理由です。すると、ご婦人はごく自然に「では、今度お教えするわ。お友達もつれていらっしやい。」と言ってくれました。ご婦人はIさんというお名前でした。

バレンタインデーを数日後に控えたある日、Iさんを講師に知り合いのママ友を集めお菓子教室を開催しました。久しぶりに連絡するママもいました。

Iさんと知り合ったコミセンで、ブラウニーを教えていただきました。材料費だけでいいというお言葉に甘え、参加費は数百円。

なのに、Iさんはブラウニーの材料の準備だけでなく、ハーブの入ったクッキー生地を用意してきてくださり、ブラウニーと一緒に焼いて私たちのお土産としてくださいました。また、Iさんは、ご自身がボランティアをされている市のハーブガーデンから摘んでこら

れた、フレッシュハーブで美味しいハーブティを入れてくださいました。ハーブティを頂  
きながら、育児のお話を伺ったりとても楽しいひと時を過ごすことが出来ました。

小さな赤ちゃんをおんぶしたり、寝かしつけたりしながらでしたが、育児の束の間の憩い  
の時間となりました。このお菓子教室は口コミで広まり、2回、3回と回を追うごとに参  
加者が増えました。そのうちに地域の子育て自助サークル「サニーママ武蔵野」として活  
動を始めました。

転職してきたばかりの半年くらいの赤ちゃん連れのママが、「今日は来てよかったです」  
と明るい顔をして帰られたことが3年前の私の姿と重なり、活動の励みになりました。そ  
の後ママさんメンバーから講師も生まれました。

調理師と食育インストラクターの資格を持ったママは食育お料理教室を定期的に開催して  
います。また、茶道教室を長年運営されている先生をお呼びして子連れでのお稽古をお願  
いしています。伝統ある茶道の世界にもかかわらず、「育児中のママにぜひ茶道を学んで  
いただき、未来を担うお子さんたちに正しい作法を教えてほしい」と、前例のない子供連

れでのお稽古を快く引き受けてくださいました。

ほかにも英会話やストレッチなどなかなか子供連れではいけない場所を講師の方の協力の下、子供と一緒にに行ける場所に行っています。

そうした子連れでの活動に地域の福祉の会の方々が教室の間の子供の見守りを申し出てくださいました。私たちの祖母くらいの年代の方もいらっしゃいます。田舎が遠く離れた私たちはなかなか祖父母と交流できません。東京の祖母に子供を見てもらえるような嬉しさで、毎回お会いするのを楽しみにしています。また、そのような他世代の方々が私たちの集まりに関わってくださいることは人生の大先輩の世代から若い私たち子育て世代への温かいエールと受け止め、感謝の気持ちでいっぱいになります。

私自身、田舎で祖母や母がご近所を大切にしているのを見て育ちました。

毎日の登下校の際、いつもご近所のおばさんに挨拶を交わしていましたし、庭の柿がたくさん取ればご近所に配りました。お萩をたくさん作ったから、と頂くこともありましたが、家族でも親戚でもないけれど、縁あってご近所で暮らしている方々を大切に、という

ことは小さいころから当たり前のこととして育ちました。

そういったことは私の周りでは珍しくなっていると云えます。我が家が入れ替わりの激しい社宅住まいゆえ、なおさら違いを感じるのかもしれない。

そのような活動を続けているうちに、「サニーママ武蔵野」は口コミやブログなどで仲間が広がり、活動開始から1年ほどで80名ほどの団体となりました。

しかし、まだ東京において育児を取り巻く環境は優しいものではありません。

かけがえのない未来を担うのは子供たちのはずです。

しかし、実際には大人社会からはやっつかいな存在ととらえられる場面が少なからずあります。殊に現代の東京にあつては「のびのび子育て」する親は周りから非難を浴びます。

もちろん、全ての場所で、とはいいません。TPOをわきまえられる子供に育てることも私たちの使命だと理解しています。しかし、東京の繁華街の一角の許された場所でもいいから、ダメダメと言わないで親子で過ごせる場所ができればいいなと思います。願わくは、

そんな場所が1か所でも増えてほしいと思います。

そして、東京が子育て中のパパママにとって、育児という大事業を行っていることを誇らしく思える街になってほしいと願ってやみません。

社会問題とされる「孤育て」「産後うつ」は損得なく付き合えるご近所とのつながりにより解消できるものと確信しています。私たちサニーママの夢は膨らみます。

## 「P―地さーくる」の事

菊池 とも子 66歳（東京都町田市）

「地域とつながりのあるお母さんには、子育ての不安が少ない」と言います。「P―地さーくる」は、その名の通りPTA世代と地域の年配者とのつながりが持てたらと思いついたものです。「ピーチ」とかわいく呼ばれていて、チラシのロゴも桃です。私の住んでいる住宅街は35年頃から、地元と大手不動産会社が土地区画整理組合を作り、開発されたいわゆる新興住宅地です。駅から少し離れていますが、そのお陰で静かで環境の良い街です。

住み始めた当初は、学校も敷地だけでまだ建設中だったり、バスも疎ら、お店も少ないと言った状況でした。住民は似通った年代で子供も多勢で、子供繋がりです大人達も知り合いになって行きましたが、隣近所の知り合いだけでは、何か災害が起こったりした場合は

不安だし、一人では何も出来ないかと危惧した人達を中心に自治会が出来ました。

その自治会は昨年30周年を迎えましたが、私は3人の子供の子育て真っ最中だったので、友人と「子供会」を立ち上げました。近隣の「子供会」が次々に無くなっていく中、まだ健在ですが、働く主婦も増え、子供の減少もあり、役員決めには毎年苦慮しているようです。

しかし、いつの間にか、地域では肝心の「自治会」加入率が40%を切るような状況になっていました。有志が集まり「自治会を考える会」を作り、住民全戸からアンケートを取り、何とかしなくてはと14ヶ月間ディスカッションをしました。私もその中心メンバーでしたが、堂々巡りに終始し、やっと「進言書」をまとめ、「自治会」役員会に提出して、会は解散しました。

進言書を参考にして、自治会も運営されているようですが、住民の自治会離れに決定打はないようです。その会に出席しながら、私個人としては、結局住民、一人一人が知り合いいになり、つながっていくしかないのではないかと思いはじめ、方策を模索し始めました。

私は2001年から地域の成瀬中央小学校のスクールボード委員（前身は学校運営委員）と言って、教育委員会から委託を受け、学校運営の一助を担っているもの（）をしている関

係もあり、PTAとのつながりがありました。丁度その頃、当時のPTA会長もPTAの問題を抱えており、大まかな点で一致をみたので、その人と2人で「P―地」を立ち上げました。

活動の拠点は小学校にお願いをし、学校の施設を使用して、学校側、PTA側の協力の下、PTA世代の人達と地域の人達とが様々なイベントを通して交流し合おうというものです。その時の校長等の賛同は得られましたが、学校が一番心配したのは、セキュリティと安全でした。

何しろ無一文での船出でしたので、保険はお母さん達にはPTA保険を適用、地域の方はボランティアで学校に来るといふ名目で、何かあった場合はボランティア保険を使う、チラシの印刷は、紙も含めPTAの負担で、始めました。私は地域の活動をしていて、PTA世代の若い人達と地域の年配者との繋がりは極めて希薄だという事に気がついていました。

地域の行事をやっても空回り。子供に声かけして不審者と間違えられる事件も起こりました。「このままでよいの？」と言う疑問とPTA世代の子育て不安感を少しでも払拭



できないかと、小さな一歩を踏み出したのです。ただの「喋り場」では無く、地域の人にそれぞれの特技を生かした講師になっていただき、それを核として異世代の交流を図りながら、お互いに学び合う事で、少しでも色々な文化のリレーが出来、自分育て、子育てに役たてばと思つての「P―地」の発足でした。大きな事を成し遂げなければならぬとは考えず、ちよつとお節介なおばさんが、近所の若いお嫁さんに煮物のコツを教えてあげる程度の事が出来れば良いと思つたのです。こういう事は小さな事でも良いから、長く続けていく事が大切であると、肝に銘じていたので、なるべく無理をしないようにと思ひました。

幸いな事に、講師探しに苦勞することはありませんでした。長年地域活動に関わつたので、人脈はあり、それぞれの方達に趣旨を説明すると二つ返事の手弁当で快く講師を引き受けてくださいました。

2年目からは、町田市の「つながりひろがる地域支援事業」の補助金を得て、講師謝礼金とスタッフの交通費程度はまかなえていますが、前途は多難だと思ひます。講座の内容は「読み聞かせ講座」、物作りが大好きな現役小学生のお母さんを講師にしての「縮緬細工」、

「食育講座」、町のパン屋さんを招いて「ピザ&ベーグル作り」、「浴衣の着付け教室」、「お茶のお手前」、「モンゴル植林ボランティアの話」。「こんにやく作り」には市長や地域振興課の見学もありましたが、実に様々な企画を年間8〜9回開催し、クラブ活動と呼ぶ人もいます。

文科省が奨励を始めた「コミュニティスクール」の先取りだと、「P―地」立ち上げの相棒は言いますが、こうした取り組みで、若いお母さん達には何となく煙たい地域の年配者達と、お互いが顔見知りになり「挨拶」が増えて来ました。

実際にその人達と触れ合う事で、お互いの理解も生まれて来ました。講座を重ねるに従って、若者から「菊池チーム」と呼ばれる仲間も増えて来ましたが、私自身は増えて来ただけでなく、これまでの地域の活動やPTAの活動の仲間の応援、つながりの後押しが大ききと思っています。学校側も地域の教育力を歓迎してくれています。学校の暗かった場所の塀のところに花壇を作ろうとなり、今や花盛りとなり明るい場所となり防犯の一助にもなっています。

夏休みの「ラジオ体操」は自治会の協力で夏休み中開催し、お父さんの姿も多く見られ、

親子や住民のコミュニケーション場にもなっています。交通安全週間には登校時間に多勢のシニア世代が横断報道に立ち地域の児童を見守っています。こういう動きは「P―地」の講座をきっかけに地域の人達が学校に出入りをするようになり、世代間を越えてお互いを理解するようになった成果と思います。

現在住んでいる場所は、子ども達にとっては「ふるさと」、アイデンティティとなる場所です。自分にとっても親元にいたよりも長く住んでいる場所となりました。地域を大切に、人のつながりを大切にして、これからの次世代に受け継いでいきたいと思います。

## 家族を超えて

岩岡 いづみ

50歳（東京都世田谷区）

わたしは自分の生まれ育った地域で学習塾を30年営んできた。

学習塾といってもいわゆる進学塾ではなく、キャンプ、バザー、料理、ハイキング、つりなどイベント盛りだくさんの塾。

学校に行っていない子もいる子もいっしょに学ぶ塾。現在は公立の教育相談室からの紹介で通うお子さん（発達に問題を抱えるお子さん）が全体の2割ほど通う塾である。スタッフのほとんどは卒業生で、彼ら曰く「ここで日々教えられたことがあるから、それを今の中学生、高校生たちに伝えたい。」と言ってくれる。それはわたしが30年前にこの塾を始めたときに抱いていた気持ちと全く同じだ。

わたしが育った地域には当時自分の子ども以外の子どもたちも我が子のように思い、育

み、学校や行政だけに子どもを預けてはいけない、「子どもはみんなで育てるもの」という精神のようなものが何人かの心あるお母さんたちのグループが中心となって自然と根付いていた地域だった。わたしはその恩恵にあずかることのできた小学生の一人で、小学生時代から地域の行事に参加していくうちに、自然と次の世代に自分が渡すべき物の存在に気づいていったのであった。

40年前、この地域を中心として子ども会が数十個以上あり、どこの子ども会も活発に活動していた。

いわゆるそれは今のように親たちがほとんどお膳立てして活動日本番のみ、子どもが参加する子ども会ではなく、子どもたち自身によって企画し、子どもたち自身によって運営される、いわば子どもの自治活動のような子ども会活動だった。

それは子ども会ができた理由として、当時の子どもを育てる環境に関心をもつ大人たちが子どもを取り囲む環境の大きな変化について危惧していたことへの行動の表れとして生まれたことに大きく起因する。それまでであった「ガキ大将集団」の自然消滅。

その背景には高度成長期の日本が通った道があり、各地にあった空き地にどんどんビル

が建ち、商店がなくなりスーパーが進出し、子どもたちの最大の社交場だった「駄菓子屋」が消えていった。子どもたちの「居場所」は現在においても日々刻々変化しているが、当時の変化はゲームの登場以上に大変化だったのだろう。大人たちはそのような「子ども社会」の変化を憂い、なにかできることはないかと考え、「子ども会」が各地に生まれることになる。

私は当時小学校高学年でその活動に参加することになるのだが、その活動の日々は今思っても心が踊るわくわくの連続だった。子どもたちがある企画を立てる。そしてガリ版切りが始まる。それを小学校の印刷機を借りて印刷する。子どもたちによって作られたチラシが当時は1000人規模の小学生たちに手渡される。会場を予約して、その準備が始まる。例えばそれが人形劇だったとすると子どもたちは脚本から演出からすべて自分たちで考え、人形を手作りして、本番に備えて練習が始まる。

たまに先輩の中学生たちも手伝ってくれる。中学になると部活動や勉強が忙しくなってくるので活動の中心は小学生高学年と中学の下の学年の先輩。もちろんその年齢の子たちが作る内容なのだから手作り感満載。それでも本番当日小さな福祉会館の一室に200人

以上の子どもたちが集まり、自分たちの作ったつたない内容の劇を目をキラキラさせて見てくれる。劇のあとはみんなで手作りゲーム。企画する側も、参加する側も次が待ち遠しくなる会だった。

大人たちは反省会に参加してくれたり、私たちが困ったときにだけアドバイスしてくれる。いつも後ろにいて見守ってくれる存在だった。「あなたたちにはいろんなことができる力がある。」「子どもは本質的には悪くない。問題があるとすれば社会を作っている大人に問題がある。だからわたしたちはあなたたちをいつも信頼している。」

それは最大限に子どもたち自身の自己肯定感を育ててくれる言葉であり、行動だった。子どもたちは自分を信じることができ、自分の力を見つけてながらいろんなことに挑戦することができた。ときには子ども会の先輩たちのいまでいう「しゃべり場」のような会に参加。中には大学で自分の研究として「子ども会活動」をしている先輩もいてその話は小学生が聞いてもむずかしいだけでなく、考えさせられ子ども地域活動の重要性をますます育ててくれる内容だった。

大人たちが作った「子ども会」活動ではあったが、見事に子どもの縦社会が作られ、そ

の内容もアクティブなものに育っていった。しかしその「子ども会」活動も次の社会の変化の波にいつしか消えていくことになる。子どもの数自体の減少、子どもの放課後社会の変化。ビデオゲームの浸透。

私が学習塾を始めた30年前はちょうどその狭間の時期で、いわゆる「金八先生」という学校問題を取り上げたドラマが社会現象をおこしており、日本全国には校内暴力の嵐が吹き荒れ、不登校の問題が顕在化してきた時期である。社会の変化の中で自分のできることは何かを問うた結果、わたしは「誰もが集える塾」「町の交差点のような塾」を始めることにした。

最初に通ってきてくれた不登校のお子さんは今や43歳。立派なお母さんである。2代目のお子さんも通って来てくれている。いろんな子どもたち、親御さんたちと出会い、一緒に育ってきた。今年は「親の会」はできて25年になる。当時様々な悩みを抱えた親たちが定期的におしゃべりできる場として「親の会」は始まったのだがそのメンバーたちが中心になって今年「大人の寺子屋」も始まった。手作り小物の会、瞑想の会、アロマを学ぶ会、いろんな講座を通して教える、教えられるではなく一緒に学んでいく場を作っていこうと



している。

昨年は卒業生の結婚式に東京方面から20名も塾関係者が鳥取までかけつけた。送迎バスの運転手さんが私たちを見て「家族ですか？でもちよつと違うようなあ？おもしろい関係ですね、みなさん。」といわれみまで大笑いをした。「町の交差点」はいつのまにか小さな「町の家族」に育っていつているのかもしれない。

いまもさまざま子どもたちが交流する場になっている。学校では授業に参加できないお子さんもこの塾ではみんなと過ごせることもある。悩みを抱えた親御さんも訪れる。いろんな先輩のお母さんの話を聞いていくうちに今の悩みは自分だけの問題でないことに気づいていく。

わたしが手渡されたバトンは今次の世代に手渡されようとしている。時代の変化に応じてバトンの活用の仕方は変わっていかばいい。その根底に流れている「つながり」と「信じる」ことさえしっかり育っていけばそれだけでいい。伸びようとする力は無限にあるはずだから。

## 敬老会から自治会活動へ

岡本 芳己 80歳（東京都町田市）

定年が近づいたころ、地元の町内会長を引き受けた。

毎年9月の敬老の日には、老人会主催の敬老会が近くの町内会館で催される。地元の市議員、民生委員と町内会長が招待される。私も町内会長として出席した。が、なんとなくすつきりしない。私たちの大先輩である地域の高齢者の方々を若い人たちが、ご招待して長寿をお祝いするのが敬老会ではないのだろうか。それが大先輩の方々から若い我々が招待されるのは、逆のように思えるからである。しかし、このような行事は何年も前から続いていた。

62歳で退職した私はフリーになった。敬老会のこと気がなっていた私は、近所の同輩の友人2人とこの話しをした。2人とも町内会長を経験していたので、敬老会について

の違和感を持っていたという。そこで3人は、現在の行事が長く続いているので、これとは別に我々の住んでいる自治会（町内会を構成している一組織）だけでも、高齢者の方々を招待しお祝いしてあげてはどうかと言うことになった。

その骨子は「自治会内の有志でボランティアグループを作り、高齢者（70歳以上）を招待し、長寿をお祝いし、会食しながら懇談する」と言うもの

そこで3人が中心になり、自治会で活動している数人の人たちに相談すると皆前向きな考えを示してくれた。

これに元気付けられた私たちは、ボランティアグループを作る計画を立てた。私たちは自治会の役員を経験した人たちにこの考えを説明し、グループへの参加を呼びかけた。また自治会長の承認を得て、自治会内に回覧を回し、参加者を募った。

こうして約50名の同調者が集まり、平成7年にボランティアグループが発足した。グループの名称は「さいかちの会」とした。これは地元で町田市銘木百選に指定されたさいかちの木があるのに因んで決められた。

第1回の会食会は平成8年5月に自治会集会所で行われた。さいかちの会会員は40歳

代、50歳代がほとんどで、皆総出で会食会の準備をした。呼びかけに応じて出席された高齢者（ほぼ70歳以上）は30名ほどであった。日ごろから顔なじみの方も、その日初めて会い、言葉を交わす方もいた。初めは堅苦しい雰囲気もあったが、出席者の紹介、会食、カラオケ、ビンゴゲーム、合唱などで和やかになってきた。全員で記念撮影するころには「楽しかった。次回はいつ？ぜひ出席したい」という声も聞かれ、会食会は当初考えていた趣旨に添った形でスタートできた。

こうして毎年、高齢者を招いての会食会は続けられた。さいかちの会では、会食会の他に、老人寄席への高齢者の送迎、車いすの貸し出し、地元小学校の福祉体験教室の手伝い、廃品回収などの活動をしている。

廃品回収では会員外の地域の人たちも協力してくれて、ダンボールや空き缶を集積場に持ってきてくれる。この収益金で自治会集会所にテレビ、座椅子、カーテンなどを寄贈し、近くのバス停に長いすを設置したりしている。

このような活動は一般のボランティアグループと変わりはないが、さいかちの会は会員構成に特長があった。前述したように、会員募集は自治会内の人で自治会・町内会活動を

していたその人やその知人を対象に行った。そのため、高齢者に対するボランティアにはもちろん賛同した人たちであるが、同時に町内会活動・自治会活動にも積極的な人が多かった。

さいかちの会は、この敬老会の趣旨を引き続き維持しながら活動を続けていた。会員相互のふれあいは深まっていった。

一方われわれの自治会も含めて、近隣の町内会では毎年変わる役員を選出に苦勞している。町田市のはずれの地域とは言え、世帯数は昭和の中ごろから比べれば、10倍には増えている。近所の人でも挨拶すればよい方で、どこでどんな仕事をしている人なのか全くわからない、まして役員を引き受けてくれそうな人かどうかどうかも検討もつかない。

さいかちの会の会員は、ボランティアの会合や行事を通して、お互いのことをよく知るようになっていた。また、町内会や自治会活動に関係した人たちであったので、一般の人たちよりも近所の人たちとの交流が多かった。

この関係で新しく会員になった人も出てきた。そして自分たちの自治会から選出された役員には多くの会員が協力し、バックアップした。

会員の日ごろの会話の中では。自治会や町内会活動の話題も多い。町内会役員選考のころになると「次の自治会長はAさんがいいね」とか「Bさんには町内会の会計をやってもらったら」などといった会話が交わされる。本人も「来年は私がやらなければならぬかな？」という気になってくる。こうした状態になったとき、役員選考委員がAさんやBさんに自治会長や会計をお願いに行くと、スムーズに受けてもらえるようになってきた。

さいかちの会の会員は町内会や自治会の中心で活動する姿が目立ってきた。また町内会や自治会の役員の人たちも、さいかちの会に入会してくれるようになった。

こうして違和感のあった敬老会からスタートしたボランティアグループは本来目指したボランティアも続けているが、むしろ今は自治会活動の活性化に効果を発揮している。最近各地で自治会や町内会活動の停滞が問題視されている。これに対する特效薬はないかもしれないが、こうしたボランティアグループでのきずな作りが、自治会や町内会活動を活性化させる一つの方法かもしれない。

## 東京と東北をつなぐ架け橋

平田 礼王

16歳（東京都新宿区）

私は、今年の夏、「日本フィランソロピー協会」が主催した「チャリティイー・リレーマラソン東京2013」に参加したこれは東北の中高生を東京に招き、一緒に走り1本のタスキを繋げるという催しである。また、大きなテーマとして、東北と東京の学生のネットワークづくりが挙げられる。

マラソン前夜、東北の生徒の歓迎会があった。違う学校の生徒と同じ机になるように分けられ、固い表情の中、自己紹介を行う。その中で、宮城県から来た私立高校生と打ち解けあい始めた。東日本大地震発生のときの様子や、現在必要としているものなどを話し合い、学校では何をやっているかなど、プライベートな内容にまで話が及んだ。そしてあっという間に時間が過ぎていった。

マラソン当日、私は選手宣誓を依頼されていた。東北代表の生徒と2人で行うのだが、打ち合わせもほほえない状態だった。思い思いの言葉を胸に刻み、最後は2人、声を合わせてやり遂げた。東北代表の生徒とやり遂げた達成感があった。

マラソンが始まると、数台のバスに分乗し、ランナーに沿いながら応援をした。バスの中でも、他の学校の生徒がいるので、少しずつではあるが、交流をした。基本バス移動で、走るのは2キロ×2回の4キロだけだ。体力自慢の多い私の学校の生徒は、物足りなさそうな顔をしていたが、競争ではなくゆったりと、そして他の学校の生徒と走るということは今まで無かった事であるし、これからも無いと感じ、心からその時を楽しんで走っている様子だった。そして約40キロを7時間ほど掛けて東京を廻り、最後は大雨の中、全員でゴールをした。その時の達成感は、忘れない。自分たちは1人では何もできない。けれども、数十人、数百人、数千人…と集まれば、必ず何かを為し遂げられると、改めて実感をした瞬間であった。

その後、東京参加校や協力して下さった企業の方々からの募金の贈呈などが行われ、最後、全員で合唱をした。曲は、NHKの復興テーマソングである『花は咲く』と、ロンド



ンオリンピックテーマソングである『風が吹いている』だ。『花は咲く』の時、まばらに目もとを押さえる人が見受けられた。私もこの歌を聞くと、あの日の様子が蘇り、やさしい歌詞と重なり、涙を堪えないといけない時がしばしばある。

その後、すぐお開きで、前日会ったばかりの人たちであるのに、何だかさみしいような、悲しいような気持ちになった。たった2日であるけれども、最初の固い表情はどこにも無く、やわらかい笑顔で満ち溢れていた。人というものは、変わろうと思えば必ず変われると思った。

結局、東京の生徒1人と東北の生徒1人とアドレスを交換し、今も連絡を取り合っている。どちらかが緊急事態のとき、話しをしたことのある人とならば、連絡はしやすい。特に私たち学生は、今後何十年も生きていくことになるのだから、そのような人が日本各地にいることが重要である。もちろん世界にも。

2011年の今年の漢字であった「絆」。この言葉を思い出させてくれたのが、皮肉にも、東日本大震災だった。しかしまた忘れつつある「絆」という言葉。今回の体験で、また思い出させてくれた。

そして、私が生きている世界、起きて、学校に行って、部活をやって風呂に入って、寝て、起きて……ということはとても狭い、閉鎖的な空間でしか生きていないということだ。日本の都市部で暮らす人もいれば、電車が1時間に1本来るか来ないかの農村部で暮らす人もいる。私たちは、広い視野を持って、協力をしないとイケないと思った。

また、東日本大震災の時騒がれていたことである「当たり前だと思う生活が当たり前ではない」ということを、もう一度自分自身に問い直すことが必要なのではないか。東北の生徒と会話をしていて、いまだに風呂に穴が空いているとか、校庭が使えないとか、あの日から時計が止まっているところがまだまだあるとのことだ。そのようなことを聞くと、いかに私たちは恵まれているのかということを考えさせられた。

今回のこの催しの2つ目の大きなテーマは学生が学生の目線で復興に必要なものに募金を使っていくということだ。地域によって使い方はそれぞれだが、少しでも役に立てたら嬉しいと思う。復興予算の使い道がおかしいとかが巷では騒がれているが、このように、学生の目線で必要なものに投資をするということは、良いことだと思う。9月に、その使い道の報告を受ける予定になっているため、信憑性も高い。このような活動を今後とも続

けてもらいたいし、続けなければならない。

このようなことを今年の夏に体験をした。同世代の若者が頑張っている。非常に刺激を受け、高校二年生で勉強や部活で忙しい中参加した少しの時間で、非常に大きなものを得られた。

この催しは、学校を通じての参加であり、引率して下さいだった先生を始め、日本フィランソロピー協会の方々、協力して下さいだった企業の方々のおかげである。感謝を申し上げたい。

## きずなづくり大賞2013 ～地域と家族の「つながり」を強めよう～ 事業概要

ひとり暮らしの人が増えている東京。

多様な背景をもつ人々が暮らしている東京。

再開発で高層住宅が増え、空き地や原っぱが減ってしまった東京。

そんな東京では、

家族や地域のきずなが人々にとって大切な支えになっています。

かけがえない家族のつながりや、

家族のような地域のつながりを実感したり、

きずなを広げようとしている人の話を聞いたことはありませんか。

きずなづくり大賞事務局では、

家族や地域の「きずな」を感じた体験を募集しています。

主 催 社会福祉法人東京都社会福祉協議会

後 援 東京都  
社会福祉法人東京都共同募金会

### 応募資格

- (1) 東京都内在住、在勤または在学の方
- (2) 東京都内で活動するボランティア団体や東京都で認証を受け活動するNPO法人等

選考方法 運営委員会にて本審査を実施

選考基準

- (1)自分の体験や実践が具体的に表現されているか
- (2)地域と家族の関わりやつながりがテーマになっているか
- (3)個人の体験を超えて、他の人や社会への応援メッセージになっているか

受付期間 平成25年7月1日～平成25年9月29日

さすなづくり大賞運営委員会

委員長

袖井 孝子 (お茶の水女子大学 名誉教授)

委員

井之上 喬 (株式会社日本パブリックリレーションズ研究所 代表取締役社長、

京都大学経営管理大学院特命教授)

澤田 敬介 (東京新聞編集局生活部 部長)

高橋 陽子 (公益社団法人日本ファイランソロピー協会 理事長)

山崎 敏子 (NPO法人コンピュータエンターテインメントレーティング機構

理事・事務局長)

竹内 誠 (東京都生活協同組合連合会 代表理事・専務理事)

川澄 俊文 (東京都福祉保健局長)

小濱 哲二 (社会福祉法人東京都社会福祉協議会 副会長)

(敬称略)

ご協力いただいた企業の皆様

協賛

東京新聞

協力企業等

特定非営利活動法人モバイル・コミュニケーション・フアンド

七島信用組合

株式会社ユタカ

公募チラシ・ポスターデザイン協力

寫田 優里奈（東洋美術学校 イラストレーション科 2年）

（敬称略）

発行日 平成26年2月12日  
発行 社会福祉法人 東京都社会福祉協議会  
東京ボランティア・市民活動センター  
〒162-0823 東京都新宿区神楽河岸1-1  
TEL:03-3235-1171  
<http://kizunazukuri.net/>  
(きずなづくり大賞 専用ウェブ)  
発行部数 2,500部  
印刷 共立速記印刷株式会社

◆この冊子は東京都共同募金会の助成により作成しました。